

特集 へはずむく

からだがはずむ、心がはずむ

村田芳子

スキップする子どもの顔は、不思議にどの子も笑っています。さつきまで泣いていた子が跳んだ瞬

たら「コロコロ変わるからココロ（心）」っていうのかもしません。

間からもう笑つてゐる。うれしいから跳びはねるのか、跳びはねるのとその両方なのでしょう。そう、心が動けばからだが変わる、しかし、そして、からだが動けば心も変わる、もしかし

「からだがはずむ、心がはずむ」。心からからだへ、私たちからだから心へ、子どものはずむからだは、私たちの心とからだが決して切り離すことのできない不可分な関係にあることを端的に教えてくれます。そして

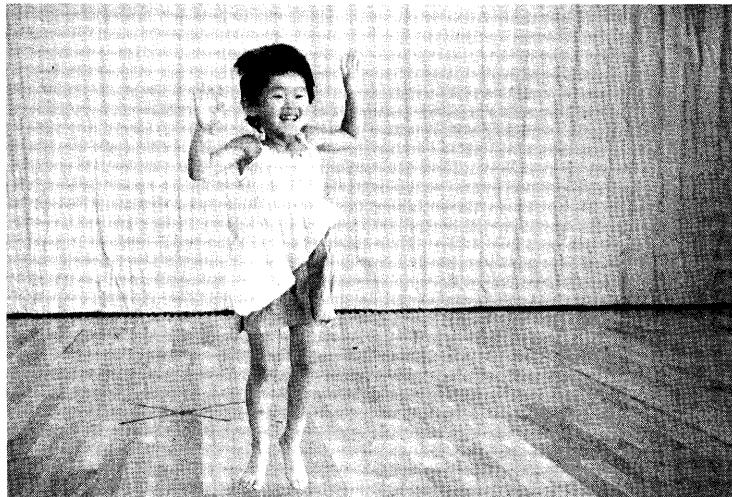
て、どちらかといえば心や言葉が優先されがちな大人の社会や学校の中で、こうした「からだから」の発信」の意味と可能性は高いと思うのです。

ここに子どもがはずんで踊る写真があります。

「はずむ」というテーマを頂いたとき、真っ先にこの写真の小さなダンサーの姿を思い起しました。ずいぶん前に撮影したもので、ここに写っている彼女は今はすっかり大人になり、しかも本物のダンサーとして活躍しています。たしか彼女が二歳か三歳の頃のものです。音楽がかかるやいなや、飛び出した彼女は全身でリズムをとり、リズムに合わせて両足でドンドンとたきつけるように跳びはね始めました。そのはずみは次第に大きくなって、片足で交互に跳びはね、それは自然にスキップになつて移動を始めました。移動の中にはターンやジャンプまで加わって、その自由なソロのダンスは音楽が止まるまでよどむことなく続きました。そして、踊つて

いる間中、それこそはじけるような笑顔です。からだ全部が笑っているようです。「子どもつてすごいなあ、すごい力を持っているんだ」と眼に焼き付いた最初の時でした。

このように小さな子どもは、音楽ひとつで自然に踊り出します。リズムにのつてスイングし、全身をはずませ、跳びはねる。何も教えられなくとも、動き方を知らなくても、自由に動き続けます。まさに子どもは皆踊りの天才です。その姿を見れば、「人間は本来踊る存在である」ことに気づかされるはずです。でも、いつから自由にからだがはずめなくなるのでしょうか。いつから心がはずめなくなるのでしょうか。いつのまにか踊ることに恥ずかしさやカベをつくつてしまつた子どもも大人も、その奥底には踊る欲求が眠つてゐるはず。いつたんリズムにのつてはずんで踊つてみれば、「気がつけば誰だつてダンサー」になれるのだから……。



このように、リズムにのつてははずんで踊る楽しさは、リズムへの陶酔<sup>トキ</sup>がもたらす快感、人間が本来的に持つている「律動の快感」に根ざしており、ここに踊りの原点があります。だから、「はずむ」ということ、とりわけ子どもがはずんで踊るという行為は、人間の身体表現やダンスという行為を教育の面からずっと追求してきた私にとって、大変重要なテーマなのです。

ここで、「はずむ」という言葉の意味を挙げてみましょう。広辞苑によれば、「①物に当たる勢いではね返る。はね上がる」「マリガはずむ」②息づかいが激しくなる。「息がはずむ、胸がはずむ」③調子づく。形勢がよくなる。「話がはずむ」「嬉しくて声がはずむ」④機に乗ずる。つけこむ。⑤思い切つてする。⑥思い切つて多分に金銭を出す。奮發する。おごる。「祝儀をはずむ」というように、この言葉には、単に物がはずむ状態から身体や呼吸そして心

がはずむ状態まで実に様々な意味を含んでいます。また、「はずむ」が「弾む」の他に「勢む」という漢字が当てられるよう、共通して「勢い」や「調子」のよい状態を示しています。つまり、内にあるパワーが外に勢いよく現れた状態、それが「はずむ」ことなのです。

更に、子どもの好きなスキップという動作は、交互に片足で跳ねながら走るもので、はずむ動きに移動が加わったものです。しかもその「タッカ、タッカ」というリズムには規則的な拍を破るシンコペー・ションがあつて、その変化が難しいけれど面白いのです。このようにスキップは、「はずむ」と「走る」というシンプルな動きからその組み合わせへ、規則的な拍に合わせることからそれを破るリズムの変化へと自然に発展した動きととらえられます。この辺りに子どもを夢中にさせるスキップの魅力の秘密があるのかもしれません。また、子どもがはずみやス

キップを好むのは、そのテンポが子どもの鼓動に近いという話を聞いたことがあります。これもいつか自分で確かめてみたい興味深いテーマです。

このように、子どもがはずむ姿は、からだの内にあるパワーが外に目に見えて表れた姿です。それは、子どもが今を生きている生命そのもののように私には思えます。そして、こうした子どもの内にあるパワー、本来誰もが持っているパワーを開いてあげるのが教育（教師）の役割、子どもと関わる大人の仕事だと思うのです。と同時に、そのパワーを開じ込めてしまうのも我々大人であることも忘れてはいけません。

子どもが動けないからといって外から形を与えていませんか？ 動きであれ、遊び道具であれ、子どものためによかれと思いながらも次から次へと与え、何かをしてしまう。こうした過剰な関わりは、時として余計なお世話になりやすいものです。子ど

す。 そのとき、すべての子どもはもう個性的な存在となるのです。また、人と揃って踊るなんてことにまだこだわっていませんか？ 形を揃えようとすれば、人と違うことは「間違い」として修正され、子どもの中に潜在するパワーも個性もやる気（本気）も閉じてしまします。そうしてパワーを失った子どもや緊張して硬くなっている子ども、逆にパワーが行き場を失つて「キレル」子どもが最近多くなつていま

まずは、子どもと一緒ににはずむことから始めてみましょう。子どもの手を取って、力を抜いて、おへ



ソではずんでみましょ。自然に笑顔と会話がはづんでくるはずです。それが子どもの心とからだの扉を開き、そのパワーは大きな可能性につながりま

す。「はずむ」ことは、子どもの未来を拓くことなのです。

(筑波大学)

## はずむ心をつくる身体

鈴木みゆき

「はずむ」という言葉を聞いて、真っ先に思い浮かぶのは、二十年前、長女が保育所で習つてきたある手遊びを披露してくれた時の表情です。こぶしをどんどん打ち鳴らし、メロディとまでは呼べないけれどフレーズを口ずさみ、それはそれはうれしそう

に、目を指したり口を尖らせたり……。ああ、この子の心がはずんでいる！娘のその躍動感が、私の中に飛び込んできたような一瞬でした。世の中、何が起こるか、わかりません。私は娘と一緒に遊ぶ中で、「手遊び」の楽しさを発見し、一緒に作つた作